

シンポジウム「知られざるバウハウス」開催

“バウハウス100周年”プレ・イベント。 文化日独コミュニティ主催

11月24日、東京・港区のドイツ文化会館OAGホールで、NPO法人文化日独コミュニティ主催によるシンポジウム「知られざるバウハウス」が開催された。この催しは、第1次大戦後のドイツに誕生し、ナチスにより閉校させられるまでのわずか14年間の活動ながら、現代美術に多大な影響を与え続ける芸術学校「バウハウス」が、2019年に開校100年を迎えることから、そのプレ・イベントとして開かれたもの。

当日は、開会に先立ち、浦川宣也東京芸術大学名誉教授のバイオリン演奏があり、続いてリムシャ(Robert von Rimsha)駐日ドイツ公使の祝辞があった。その後シンポジウムがスタート。まず、田中辰明お茶の水女子大学名誉教授が基調講演を行った。田中氏の講演概要は以下の通り。

バウハウスは1919年にドイツのヴァイマールに設立された写真、工芸、陶芸、デザインなどを含む美術と建築の総合的な教育を行う国立の学校であった。その後 Dessau、ベルリンと教育の場を移動し、1933年には台頭したナチスによって閉校を余儀なくされた。この間わずか14年間であったが、教育にあたった教員の豪華さには圧倒される。合理主義的、機能主義的な芸術を目指し、モダニズム運動を行った。しかしバウハウスの14年間の存続期間はヴァイマール共和国の時代と一致する。ヴァイマール共和国はヴァイ

マールで憲法の草案が作られた事からその名がついている。憲法は極めて民主的で女性に参政権が与えられた。バウハウスはこの時に発足した国立の学校であったため、女性の入学志願者が多かった。それまで大学で学ぶ女性は極めて稀であった。初代校長のグロピウスは予想しなかった事に大いに驚いたが、入学を許可した。その結果女性は織物、染色などの技術を習得し、社会進出を果たした。バウハウスの教員になった女性もいる。ヴァイマール共和国は民主的な憲法を持つ理想国家のように見えたが、政権がよく交替し、不安定な国家であった。また天文学的なインフレーションが発生し、一般庶民は生活苦にあえいだ。一方でこれをうまく活用し、利益を得たものもいて、貧富の差が大きくなった時代であった。バウハウスもヴァイマール共和国の光と影の影響をまともに受けた。

バウハウスの教授陣の名声は素晴らしいものがある。中でもパウル・クレー(Paul Klee)、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer)、ヴァシリ・カンディンスキー(Wassili Kandinsky)、ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger)などはこの時代を代表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン(Johannes Itten)、ヨーゼフ・アルバース(Josef Albers)、ラスロ・ナホギ=ナギ(Laszlo Moholy-Nagy)



▲バウハウス・デッサウ校

等がいた。ヨハネス・イッテンは最初に教育学を学びその後絵画を勉強している。芸術は天性のものと考えられていた時代に、教育によってある程度の域に達することが可能であるとされた。彼らの業績は現在も芸術教育に大きな影響を与えている。これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス(Walter Gropius)、3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe)で、この2名は近代の4大建築家に名を連ねる。こうなると、二代目の校長ハルネス・マイヤー(Hannes Meyer)の影がどうしても薄くなる。しかしハルネス・マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自らも素晴らしい作品を残している。マイヤーは、グロピウスにより、1927年4月に招へいを受け、かつグロピウスの後任校長にグロピウス自身が1928年初頭に指名している。しかし実際にはグロピウスとマイヤーの折り合いは悪く、Bauhaus内での文書にも活動があまり出てこない。グロピウスとマイヤーの折り合いが悪くなった原因はグロピウスの事務所には仕事が入るのに、マイヤー率いる建築学部には仕事が入らなかったという事がある。これらの事がマイヤーの影を薄くしている一因と考える。マイヤーはもっと評価されてよ

い建築家である。

バウハウスは突然ワイマールの地に姿を現したのではない。1870年ころ、ドイツの芸術工業は英国より立ち遅れていた。1896年ヘルマン・ムテジュウス(Hermann Muthesius)が英国に留学し、「田園都市」の考え方、芸術工芸、工芸学校の思想を持ち帰った。ムテジュウスは1907年にドイツヴェルクブンド(Deutsche Werkbund)を立ち上げた。その目的とするところは「芸術家、産業界の企業家、職人の協力を通して、産業製品を発展させること」であった。すなわちそれまでドイツ製品は英国製品より品質が劣ると考えられていたが、ドイツ製品も輸出にかなう「優良品」にしていくことであった。ドイツヴェルクブンドにはブルーノ・タウト(1910年入会)、ヴァルター・グロピウス(1912年入会)も参加し、活発な活動を行った。

ブルーノ・タウトが活躍した時代とバウハウスが活動した時代は一致する。しかしブルーノ・タウトはバウハウスで教鞭をとったこともないし、別の活動のように考えられていた。ブルーノ・タウトは芸術研究会の機関誌「建築プログラム」(“Ein Architekturstudienprogramm”)に建築に際しあらゆる芸術が協調すべきこと、さらに大衆のための建築の試作と展示会の開催が重要であることを訴えた。タウトは「なぜなら工芸と彫刻、そして絵画の間には境界はなく、すべては一つのものであり、建築をしていくことである」と述べている。グロピウスは「共に作り上げよう、未来の新しい建築を。それはすべて同じ形態をとるであろう。建築も、彫刻も、そして絵画も」と述べている。明らかにタウトの考えが

グロピウスに影響を与えたと考えて良い。またバウハウス発足にあたり、グロピウスはバウハウス宣言とも言われるマニフェストを発表している。その表紙はライオネル・ファインINGERによる木版画で、大聖堂が描かれ、その塔の先端には絵画、彫刻、建築の3つの芸術を示す星が輝いている。ブルーノ・タウトは1919年に著した「都市の冠」でゴシックの大聖堂の塔を描いている。これはグロピウスのマニフェストに影響を与えている。

ミース・ファン・デル・ローエはナチスが政権を取った数ヶ月後1933年に厳しい弾圧を受け、苦渋の選択によりバウハウスを閉校した。バウハウスの教授人の多くは主に米国へ亡命し、そこで大きな影響力を持つようになる。ヴァルター・グロピウスとマルセル・ブロイヤーは建築家として、またハーバード大学教授として建築学を教授する。ミース・ファン・デル・ローエはシカゴで鉄とガラスの超高層建築を建設し活躍した。ヨーゼフ・アルバーはブラック・マウンテン・カレッジで教鞭をとり、ラスロ・モホリ＝ナギは1937年シカゴにニューバウハウスを設立している。その他外国へ逃げそこで成功したバウハウス関係者は多い。しかし全てのバウハウス研究者がドイツを去ったわけではない。ナチスに追われ、海外逃亡を果たしたくてもできなかった人もいる。中にはナチスの犠牲となり処刑されたバウハウス関係者もいる。また自分が生きるために止む無くナチスに迎合してしまった人もいる。1929年にバーゼルで開かれたバウハウスデッサウの展示会ポスターは秀逸である。これはフランツ・エー



▶田中辰明お茶の水女子大学名誉教授

リッヒにより作られた。ドイツに残った彼は一旦プッヘンヴァルト(現在はヴァイマル市)の強制収容所に収監される。しかし彼はもとバウハウスにいた人間であることを名乗り、強制収容所の設計に従事する。強制収容所の門扉は氏の作品である。こうして生き延びたことにより旧東独で活躍することができた。

次に、新藤真知日本パウル・クレー協会代表が、デザイン学校の生徒を引率してベルリン、デッサウ、ヴァイマルのバウハウス研究施設を訪ねた「バウハウスツアー」の経験を報告した。そこで行ったワークショップの成果を説明し、バウハウスで行われていた舞台工房の解説を行った。

また、自由学園図書部・資料室の村上氏は自由学園とバウハウスの関係について解説した。1932年に自由学園卒業生の山室光子と今井和子が21歳の若さで欧州の工芸研究に派遣されたことについて解説。二人が、バウハウスで基礎教育を担当していたヨハネス・イッテンがベルリンで創設した学校「イッテンシューレ」に学び、成果をもって帰国し、自前の産業工芸組織「自由学園工芸研究所」を立ち上げ、工芸教育と工芸事業を開始して、産業振興や輸出工芸振興に貢献したことを紹介した。

その後、浅野忠利元竹中工務店常務取締役をモデレーターに、前出の演者3氏が参加したパネルディスカッションが行われた。